



民土のルーミユシカ

どもなき墓場を廻つて然る後、其中の一箇所に向つて掘り初めた、自分
 が請求してさせるとは云ひながら之を見た時は思はず悚然として身
 を慄はした、此回々教徒の墓を掘るのは容易い、此邊では死骸を埋める
 に箱或は柩に入れず其儘埋めるのである、而して、白い布片で體を掩ふ
 て居るのみで他に體を掩ふて居るものは一もない、果して掘當てたが
 此時月は隠れて光を減じた爲めに薄暗き光線に依りて死骸を検査し
 た、然るに我々は此處に長く居る事は出来ない、それ故に毎晩出掛けて
 行つた、其好良なる物を得るには充分の検査をしなければならぬ、發掘
 した頭蓋の中には朽ちて役に立たぬのもあり、又は餘り古きものであ
 つて到底役に立たぬのもある、斯う云ふやうにして漸く十箇を得た、然
 るに此邊でも死骸を掘るのは危険な事であるから十箇を以て満足し
 なければならぬ、若も此事を聞いたならば回々教徒は我々に向つて
 如何なる仇を報ゆるかも知れない、縱令回々教徒は我々に向つて復讐

をせぬまでもマハラジャは我々を此國から放逐するであらう。彼は我々に對して、懇篤なる待遇をして居るのに斯の如き不倫なる行ひをしたと云ふたならば、彼は如何に憤るかも知れないのである。此發掘の役目をしたものはカシユミール人であつて、一般に此人民は牛羊を屠つたり、或は其皮を剥いたりする最も下賤な商賣をして居るものであるけれども、此教徒に屬さないものは實に禽獸視されて居るのである。其教徒以外の者は如何なる物を喰べるかと云へば病死したる獸肉を喰べて居る、我々の使つたのは此種類に屬する人間であつたが之には非常な金を拂つたのである、拂つたのも無理はないのである。彼は死體に觸るゝ事を非常に恐怖して居つたが我々が多額な金を與へた爲めに彼は勇氣を鼓して愾くの如き所業を爲したと考へる。又此種族の中に音楽者及舞者が居る、然るに此種族の中に階級がある、譬へて見たならばマハラジャの前に於て踊る舞妓等の如きは多少地位が高

いやうに見受けられる、我々は不幸にして此處に滞在中祭典に列する事を得なかつた、それはマハラジャが病氣であつて宴會などは殆ど廢せられて居つたからである。

此邊にはアフガニスタン人は稀であつて、良人の如きは此アフガニスタン人を検査する機會を得なかつた、併ながら漸く二三を検査されたが別に體格上に著しき特徴と云ふものはない、我々がサマルカンドに於て見た所の者と殆ど同様である。

十月十一日プラターに向つて此地を出立した同行者はマハラジャより付けられたる某及二三の人等であつた、一時間ばかり船にて河を上り此島に到着した、此島は我が同國人なるジャックモン氏が千八百三十二年に住はれた土地で、實に我國の旅行者の紀念とすべき土地である、此島に着くと先づ第一に島の中央なる所に適當の位置を撰まして天幕を張つた、然る後ジャックモン氏の靈を拜した、此處にて故人を吊ふた

のである。土民等は我々が如何なる事をするかと非常に驚いて居つたが故人を吊ふのを見て彼は悦んで仕事をした。此儀式が済んで我々は天幕に歸つた。ハヤ水鳥は時に就いた。然るに空には殆ど焼けんとするやうな炎が見える。是は即ち山火事である。其絶景と云ふものは歐羅巴などに於ては見得べからざる事である。此山火事と云ふものは其山の地面をして豊穰ならしめん爲め態々此邊に住む者等が雜草を焼くのであつて、是から後も再び恚くの如き事を見た事がある。天幕に歸るや我々は直ちに寢に就いた。夜の涼しさは一層であつて、此期節になると熱病が非常に流行つて来る。我々は此處に居る間に種々なる物品器具を買入れた。中には精巧以て人を驚す物も澤山ある。クラーク氏の如きは財囊を拂つて物品を買収したが是は倫敦のケンシントン博物館の陳列品とさるゝが爲めである。

彌々此地を出發する事になつて用意に取掛つた。先づ第一注意をすべ

きものは、即ち腦蓋骨の箱である。妾は非常な注意を以て自ら之を包む所の任に當つた。

十三日朝五時我々は船に乗つて、スリナガールを出發した。マハラジャ殿下はマルリと云ふ所まで侍臣をして我々を見送らしめた。マルリと云ふ所はカシユミールの境より遙かに隔つた所である。此人のみならずマハラジャ殿下は我々に不便を感じさせない爲めに、二三の使丁を附随せしめた。加之コハラと云ふ所までは、マハラジャに於て費用を支出すると云ふ話である。それが爲めに我々は非常な助を得たのである。既に我々の財囊と云ふものは長い旅行の爲めに最早盡きんとして居つた所である。然る所幸に此待遇を得て充分に我々の意を充す事の出来るやうになつたのはマハラジャに對して感謝する所である。元來英國人は旅行するに贅澤である。露西亞人は之に反對であつて必要の外何も餘分には費さない。此邊では夏の食料品は腐敗して食する事が

出来ない冬は又凍結して了ふ警へて見たならば露西亞人は何を以て
 飢を禦ぐかと云ふと彼は茶を呑み鹽肉を食ひ冬は片布に包まつて寝
 ね夏は藁の上に寝ると云ふ風であるが英吉利の兵隊と露西亞の兵隊
 との差は甚だしい况や士官の間には於ては最も甚だしいのである我々
 は此旅行に就いて四人の僕を連れて居つた一人は料理番二人は侍奴
 一人は旅行の初より連れて居る者である一人は回々教徒であつて我
 々の爲めには終身使役される事を望んで居る者であつた其外の一人
 は印度人であつてシムラより連れて来たものであるが皆我々に對し
 ては實に忠僕である此二人は我々が船で行くに彼等は馬へ乗つてパ
 ラムーラへ行つて其所で我々を待つ積りである最早此時分には冬に
 なつて来て何も見る物はなし又食料品の欠乏を告げたが爲めに此處
 に駐割して居る英吉利人は此處を出發して他へ移るので我々が此地
 を出發した最後の者であると云ふ事であつた

朝六時我々は此地を出立したが天氣は清明であつて我々が過ぐる處
 は朝霧に掩はれて影朦朧として居る此邊には幾十と云ふ小船が草を
 積んで往來する是は冬の間羊を飼養する爲めに運ぶのである此邊の
 牝牛は乳に乏しくある蓋し此山腹には夏の間草が少くないからであ
 るそれは太陽の光りが強い爲めに皆枯死するのである加之此牛の種
 類が餘り頁くない其證據には印度に來て見ると到る處牛肉は殆ど口
 に適するものがない此幾十艘の船の爲めに我々の航路を妨げたが遂
 に此處を横斷つてシムラム河に出た然るにマハラジャの窓牖は閉ぢ
 られて影淋しく見受けられた之を過ぎて河を下るに隨つてスリナガ
 ールの景色は見へないやうになつた我々の見た最後の家は即ち税關
 である此處には多人數の者が居つて輸出入の事務を取つて居る税關
 の建築は眞四角の木造であつた我々が此處を出立するにはマハラジャ
 ヤが命令して我々の荷物を改めない事になつた此税關の傍に架せら

れた橋は如何にも清雅な橋であつて、スリナガールを離るゝ所の紀念として今日まで我々の眼に残つて居る。

五時頃になつて暴風雨が來た、其勢猛烈であつて砂礫を吹き飛ばすこと殊に甚だしい、加之シエラム河の波は甚くあつて船は殆ど覆らんばかりである、故に我々は船を岸に繋いで風の止むのを待つて居つた、一時間も経つて風は平穩になつたので再び船を出した、其夜は船の中に寐たが夜間は碇泊した。

翌日午前四時再び進航した、然るに諸處の山は白衣を着けて殆ど青き色は眼に映らない、此處を過ぎてパラムールに到着した、此處はシエラム河に沿ふたる河であつて、堅固な要塞がある、此村は随分旅人の往復する所でカシユミールに行くには是非此村を過ぎなければならぬ、我々は此處で船を下りて而して外國人の爲めに建設された宿泊所に這入つた、此處では宿代を拂はずして此ブンガルに附屬して居る僕

婢に酒代を遣れば濟むのである、此宿泊所は最も單純なものであつて、到底記すべき價值はない、謂はゞ雨露を凌ぐに足ると云ふのみである。

十六日正午我々はパラムールよりヴァニヤールに向つて出立した、此處に往く道は随分峻悪ではあるけれども、今まで旅行した所に比ふれば聊か心を慰める事が出來た、ヴァニヤールに於て見るべきものは古寺であつて、カシユミール中に於て此古寺ほど鄭重に保存したものはなからうと思ふ、此處を出るとシエラム河畔に出るが、此邊は實に激流であつて其流の矢の如き有様は見ると、身の毛が竦立つやうである。

カンブールよりウリーに至る道は森林を横断しなければならぬ、チヤヨキと云ふ村には精巧なる彫刻物を以て掩はれたる一の寺がある、良人は多額の金を與へて窓にある彫刻物を購ふた、ウリーに着いたが、カシユミールの古き鐵砲があるのを發見した、それ故良人は之を求めやうとしたが、是は一人の回々教徒に屬して居るものであつた、其者は

非常に宗教家であるが爲めに容易に賣る事を諾さない良人は充分の價を拂はふと云たが彼は之を拒んだのである、然るに良人が持ちたる短銃と交換を求めた彼は非常に悦んで其交換を諾した、それで先づ其使用法を教へた所彼は喜色滿面に溢れ、幾度かそれを打つてみたが、愆くの如き野蠻な人間であるから人でも傷けなければ宜いと我々は非常に心配をした、

翌日ガリー及タンデルに向つて出立した、此道は別に記す丈けの必要もない、唯だ餘り高くない山腹を往くのみである、既にマルリーに近いて来た、併ながら我々は非常に疲れて足を進める勇氣もない、けれども其目的地に達せんとして苛つのみであつた、道は益々奇麗になつて来て、而してムザバラバットと稱する所に到着した、此處には宿泊所があるけれども到底足を入られない程荒廢に歸して居る、戸はなく窓は破れ、雨は漏ると云ふ有様である、我々は非常に不愉快を感じて、此宿泊所の

者に詰つた所、スリナガール及びマルリー一往く人間は恁様な所に泊らないと云ふ事を以て答へた、此ムザバラバットはカシユミールからアフガニスタンへ出る主なる道である、此村はマエラム河とキヤンガ河と合する所に位して居る村であつて、人口も随分多いやうに見受けた、此處には市場などもあつて中々盛大のやうであつた、

翌日此處を出立して夜ナインスイクと云ふ河畔に到着した、此河に沿ふてデリー村に往つたが、此の村はサバミールと云ふ小港に位する小村である、我々が天幕を張つたる所からはナンガバルボ又ヂヤールミールの山を見るが、是は海面を抜くこと八千五百六十米突の高山である、北方ヒマラヤの最も高いものであつて實に是程の高山は此邊では見られない、我々は此處で一日休息して馬を休ました、其翌日朝此處を出立してムザハラバットに歸つて支度の出来て居るのを検査した、此ムザバラバットの婦人は美しくあつて衣服の形もカシユミール人に

髣髴として居る。最早氣候も段々寒くなつて来て山々は一層白くなつて来たが、此處は餘り雪が降らないさうである。氣候も寒くない地であるが暖爐の必要は充分に感じられる。此處を出立してマルリーに着いた。此處は即ち英吉利人の保養所であつて、病院なども建築されて居る。此マルリーからはナンガバルポの氷河を眺める事が出来る。我々が宿泊したホテルには殆ど人影がない。冬は倍々進んで来るし、今まで居つた旅客共は温暖の地方に向つて此處を去つたのである。此ホテルは實に整頓して居つて料理なども印度では口にせぬ位の好味を持つて居る。此處でマハラジャから送られた侍臣共に暇を告げる事になつた。例に依つて彼等には金を以て禮とする事にした。

此マルリーに滞在した後ちマルリーよりラウルピンツシに向つて出立した。此街道は英國人が造つた街道であつて我々も美しく感ずる位であつた。夕方になつて彌々村に到着する事になつた。ラウルピンツシまで

の降坂は随分急しい。マルリーは海を抜くこと二千四百米突の所にあるけれども降るに随つて五百五十米突になつて了つた。ラウルピンツシは商賣の盛んな所であつて即ちアフガニスタンへ行く關門である。故に役人の通行は激しいのである。我々は此處を見物しやうと考へて居つたが、既に時も追つて来て居るので到底長く滞在する事も出来ない。から遂に此地を出立してラホレーに戻つて来た。ラウルよりラホレーに行く道は危險ではあるがそれ程にも感じなかつた。三十日朝我々はラホレーに到着した。暫く此處で長路の疲れを休める事にした。

ヒマラヤ山探險 終

30/11/37

明治三十三年八月六日印刷
同年八月九日發行

著者 長田忠一

東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者 和田勉

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷者 青木弘

東京市日本橋區通四丁目角

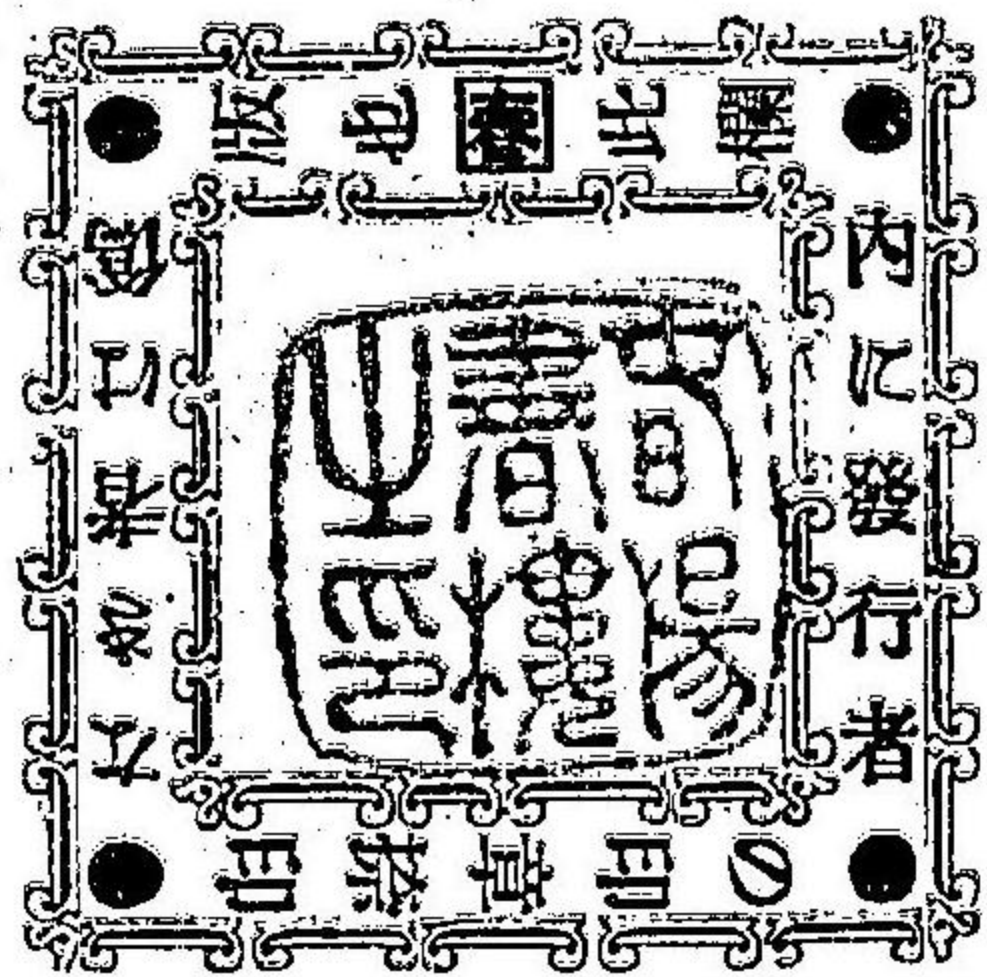
發行所 春陽堂

電話本局五拾壹番

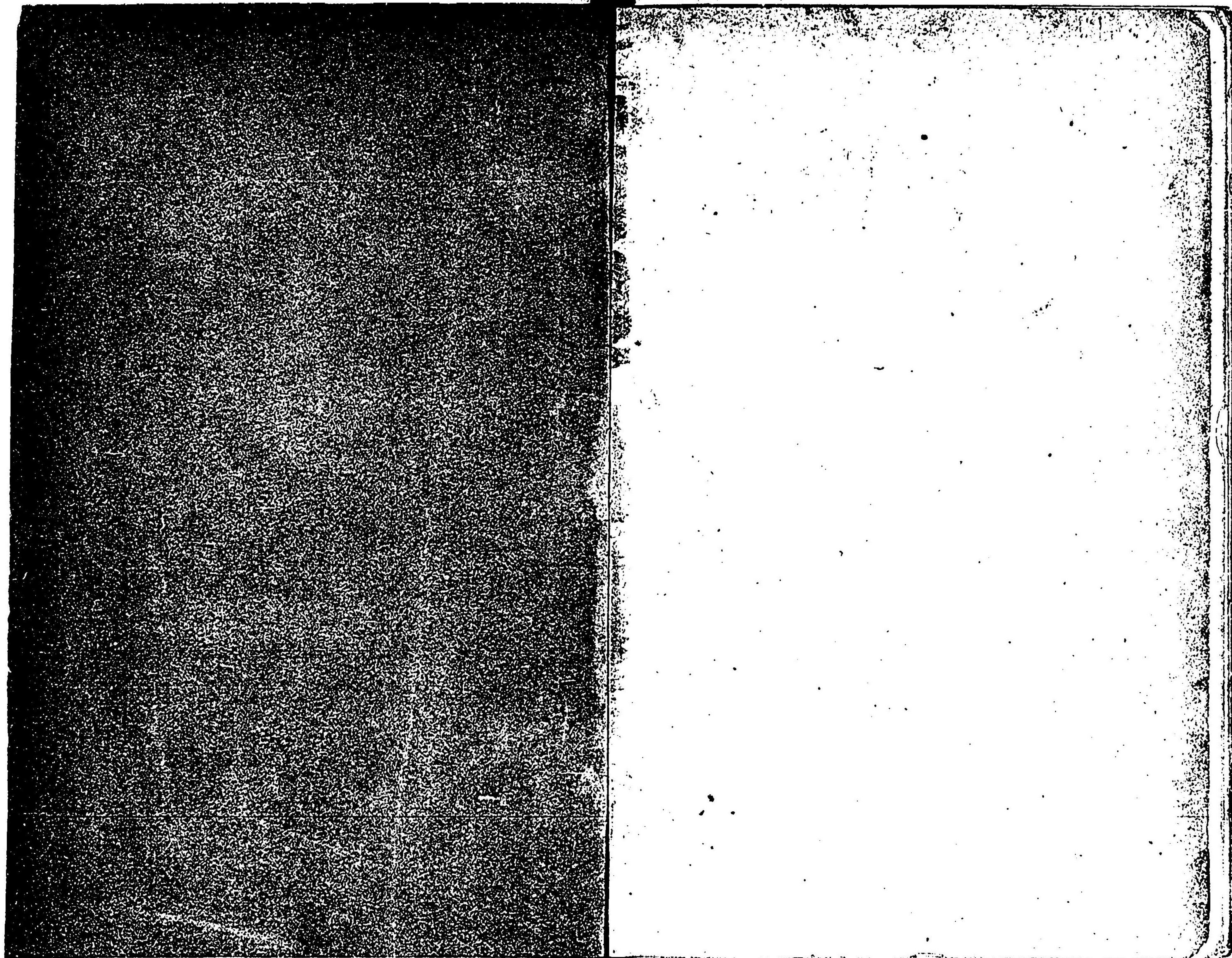
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所 株式會社 秀英舍

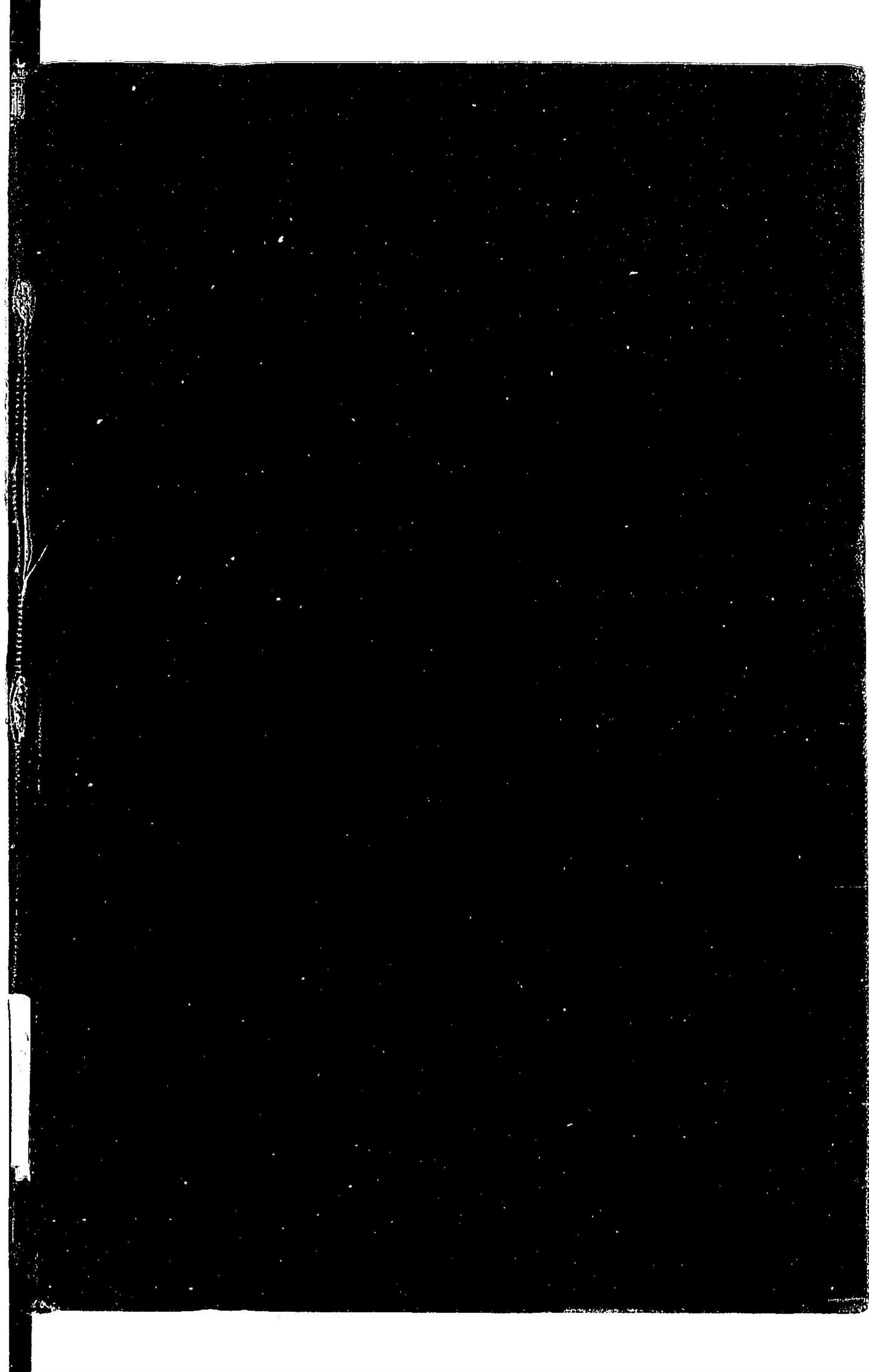
(電話新橋十八番)

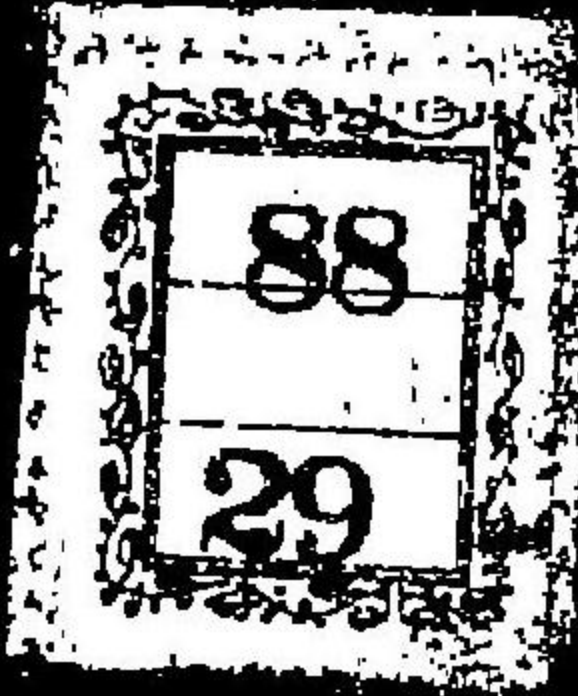


● 内に發行者 ●



88
29





026792-000-7

88-29

ヒマラヤ山探険

長田 秋涛/訳

M33

ADD-0493



